

玉繭をつくりやすい蚕品種「玉小石」の育成と実用化

2頭以上のカイコによってつくられる玉繭は、偶発的にできる大形の繭です。古来日本では玉繭を用いて織物をつくる文化があり、紬の産地では今でもその需要がある反面、国産の玉繭の入手はとても困難なものとなっています。

2008年より農林水産省と大日本蚕糸会が実施した蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業の一環として、当研究所では、在来種「小石丸」の2系統を育成素材として、玉繭をつくりやすい性質を持つ「玉小石」を育成し、牛首紬ならびに洋装服地の作製、販売へと実用化しました。

そして、養蚕学校をルーツに持つ石川県立津幡高等学校において、創立百周年を迎えるにあたり『養蚕復活プロジェクト』が立ち上げられて、2018年からは養蚕授業の復活を目的とした「玉小石」の飼育が行われ、その繭を使った織物（牛首紬）がつくられています。

また、江戸時代に福井藩の財政を支えた絹織物「奉書紬」の復活を目指して2018年に福井県の工房で「玉小石」を用いた絹製品の作製が開始されました。

さらには、2019年より「玉小石」を用いた結城紬などの作製と販売が行われています。

この詳細については、『大日本蚕糸会研究報告』第58号(2010)、『蚕糸・昆虫バイオテック』第80巻 第1号(2011)、『きものサロン』2012年春夏号 および2014年春夏号、『日本シルク学会誌』第27巻(2019)をご覧ください。



写真提供：くらしつむぐあとリエ



写真提供：ナイスニッポン（株）